様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３５３１３
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2020
課題番号：１９Ｋ１４２２０

研究課題名（和文）批判的読みの学力評価手法の開発に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental study on development of assessment method for critical reading

研究代表者
村井　隆人（Murai, Takato）

中国学園大学・公私立大学の部局等・講師（移行）

研究者番号：８０８２６１５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、米国の情報的文章の批判的な読み書き能力に焦点を当てた大規模評価の①学力的背景、②スタンダードや教材の一貫性、③教師や研究者等の受容・評価、の3点を明らかにしようとした。
①論証による読み書き能力の重視が背景にあることが分かった。②スタンダードは小学校では議論の論点を捉えること、中学校では、妥当な反論を加えること、高等学校では、価値観やバイアスを踏まえて論理を組み立てることが求められていた。評価は，教材（間）の対立する議論の複雑さや、立場等に関わる表現の増減により一貫性を担保しようとしていた。③評価の回答や採点では、ルーブリックの論証の記述が回答を十分に区分することができていなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の第一の意義は，世界的な潮流である高次の能力を対象とした大規模評価の開発と実施において，米国の複数の情報的テクストを批判的に読むパフォーマンス課題の在り方とその課題について明らかにしたことである。第二の意義は，これらの知見をもとに，我が国における説明的文章の批判的読みの評価の在り方について示唆を与えたことである。説明的文章の読みに関する大規模評価は高次の能力を対象としたものでも条件付き記述問題に留まっている。これに対して本研究の知見は対照的な自由記述型の評価の在り方を示した。直ちに従来の問題の改定を迫るものではないが，新たなの評価手法に資する基礎的な知見を提供した点に社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：Recent summative assessment attempts to contribute to classroom learning by authentic performance tasks. In this study, I analyzed the English Language Arts performance task of PARCC and SBAC in the United States to consider authentic assessment of critical reading and writing skill. In the United States, Common Core State Standards emphasizes the ability to read some informational texts and writing argumentative essay.
As a result, the two were found. (1) I found that the two consortiums arrange complexity of the task conditions and text information with development of the ELA standards. (2) It became clear that the rubric could not distinguish argumentative skill adequately. There needs specific rubrics focused on the argument. This research findings could contribute to develop the new assessment method for critical reading and writing in Japanese expository text.

研究分野：教科教育

キーワード：説明的文章　Informational Text　批判的読み　批判的思考　パフォーマンス課題評価　大規模評価　総括的評価　教育評価

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

説明的文章の読みの学習指導においては、文章の要旨の理解に留まらない批判的な読みの重要性が継続的に指摘されてきた。批判的読みとは、論証やレトリック等を適切に評価する合理性と、批判をする自分自身や状況を捉えなおす反省性の 2 つが十全に発揮されることを理想とする読みである。我が国において批判的読みの実践が定着しつつあるのは、2000 年代の OECD による PISA 調査の影響によるところが少なくない。また、PISA 調査等の検討により、批判的読みの対象が、文章に限らず非連続型テクストや動画像などに広がっていることが指摘できる。

しかしながら、現在の大規模かつハイステイクスな評価である全国学力・学習状況調査においては、小学校段階ではいわゆる説明的文章は出題されず、中学校段階は記述問題が充実していない。重ねて、高等学校段階では「大学入学共通テスト（仮称）」のプレテストにおいて、批判的な読みを求める評価問題が開発されているものの、テクストは実用的な文章に限定されており、中学校段階の発展に位置づけられる評論教材については記述問題の対象になっていない(紅野謙介(2018))。これらの記述問題は最大でも 200 字程度の条件付き記述問題に収まる。

以上をまとめると、説明的文章の批判的読みの研究および実践が興隆しているにも関わらず、それに対応する大規模かつハイステイクスな評価手法が開発されていない点に課題がある。また、初等教育段階から中等教育段階における教材の発展性についても考慮がなされておらず、教室での指導内容と乖離しているという問題を抱えている。一方、世界的にみれば近年の大規模かつハイステイクスな評価は、その教科で求められる高次の学力を問うこと、また教室における学習の文脈を無視しない問題を作成することに力を注いでいる。この潮流の中で、とりわけ説明的文章の批判的読みの評価手法の開発に力を注いでいるのが米国である。米国では、2009 年ごろから、州共通の国語と算数のカリキュラムスタンダードとして Common Core State Standards が構想された(CCSS)。これは大学や就職への準備を目的とし、K-12 を対象とした一貫性のあるカリキュラムであり、2014 年以降に 46 の州で完全実施されている。そして、CCSS の中では、説明的文章を含む情報的文章（Informational text）の読みを対象としたスタンダードが設定されており、その中には批判的な読みの事項が明示されている。初等教育段階から中等教育段階における批判的読みの能力と教材の一貫性が担保されているということである。

そして、CCSS 下で行われる大規模な評価については新たな評価システムの開発が求められ、審査の結果 PARCC(Partnership for Assessment of Readiness for College and Careers)と SBAC(Smart Balanced Assessment Consortium)という 2 つのコンソーシアムが採択された(高野雅暉(2017))。PARCC と SBAC は独自の手法で、第 3 学年以降の各学年の評価問題を開発している。しかし、CCSS については、制度や学校への影響が言及されるのみであり、教科教育の領域において詳細な検討がなされているとは言えない。

２．研究の目的

以上の背景に基づき、本研究では我が国における説明的文章の批判的読みの大規模な評価――とりわけ、教室との学びと乖離しない評価――の開発に資するため、CCSS で採択された 2 つの評価コンソーシアムのパフォーマンス課題評価に焦点をあてて、次のことを明らかにする。

①PARCC 及び SBAC の具体的なパフォーマンス課題と回答の実際を明らかにする。

②PARCC 及び SBAC のパフォーマンス課題と、CCSS の国語科のスタンダードとの対応を学年間の能力の発展性という点から明らかにする。

③PARCC 及び SBAC に関する教師や研究者の受容・評価を明らかにする。

①について、大規模な評価問題は要約的な紹介ではなく、問題そのものを具体的に明らかにすることが重要である。そこで、校種や特徴的と思われる課題を対象に、その試訳を行い、許諾を得た問題については公開することで、課題や回答を検討できるようにする。②について、CCSS の特徴は K-12 のスタンダードと教材の一貫性が担保されていることである。これが各評価コンソーシアムのパフォーマンス課題ではどのように反映されているか、ということを明らかにする。併せて、そのような批判的読みの指導にはどのような学力的な背景があるのか、ということについても検討する。③PARCC 及び SBAC のパフォーマンス課題は、教室での指導との乖離を減らす試みの 1 つである。そのような評価が学習者や教師、研究者によってどのように受容・評価されているかを明らかにすることで、批判的読みの大規模な評価を開発する際に乗り越えるべき課題について明らかにする。

３．研究の方法

①については、PARCC 及び SBAC で公開されている評価問題のうち、情報的テクストの批判的読みに関わる課題や、対象となるテクストに特徴がある課題を対象に、課題とその回答や採点理由の試訳を行う。また、各評価コンソーシアムに翻訳の許諾を申請し、認められたものについてはその文章や問題、回答例全体の試訳を公開する。

②については、①の対象とした評価問題を対象に、初等教育（3-5）、前期中等教育（6-8）、後期高等教育(9-12)の各学年段階における､テクストや評価する能力の発展性について検討する。発展性を捉える観点を設定するために、CCSS のスタンダード及び、情報的テクストの指導書や批判的読みの成果物となる議論的な文章の書き方に関する指導書を分析する。これを通して、パフォーマンス課題の背景に情報的テクストの批判的読みの学力観をもとに、パフォーマンス課題やその回答がどのように発展していくのかを明らかにする。

③については、まず ELA のプレテストを受けた学習者のアンケート調査、研究者による ELA の大規模評価に関するレビューをもとに、PARCC 及び SBAC の評価課題の受け止めについて

明らかにする。また、国語科全体でなく、パフォーマンス課題に焦点化した研究をもとに、批判的読みのパフォーマンス課題としての課題を明らかにする。

４．研究成果

①評価問題と回答の具体

ここでは 2 つの評価コンソーシアムの情報的テクストを対象としたパフォーマンス課題の概要と具体的な問題や回答の特徴について確認する。PARCC の情報的テクストを対象としたパフォーマンス課題は Research Simulation Task（RST）である。RST では、80 分前後の制限時間で、２～3 つのテクストを対象に、主張などを確かめる読解問題と、複数のテクストをもとに話題に応じた自身の考えや分析を示す記述問題を解いていく。その構成は表 1 のようになる。

表１　RST の基本構造

課題
テクスト A+読解問題
テクスト B+読解問題
記述問題
複数テクストの読解問題

表２　SBAC の基本構造

シナリオと課題
テクスト群
パート１：確認問題 （書くことに対応する）
パート２：シナリオと記述問題

課題は、例えば 3 年生では動物と自然の環境について調べるという課題のもと、野生のオオカミに関するテクストを読む。予め述べておくと、SBAC と比較すると課題の記述は少なく簡素になっている。テクストは最大で 3 つ程度だが、特徴的なのは 3 つのうち 1 つはインフォグラフィックやドキュメンタリーやナショナルジオグラフィック、TED などの動画像のテクストが含まれることが多いということである。テクストに続く読解問題は、基本的に多肢選択問題で、主張などを選ぶ Part A と、その根拠となる原文を選択する Part B に分かれている。読解問題では、複数のテクストの情報をベン図に整理するなど、思考ツールのように情報を整理する問題が 1 問以上存在することが多い。記述問題では、「2 つの文章の重要な記述やフレーズを比べたり、対比させたりして、絶滅しかけている動物をどうしたら助けることができるのかエッセイを書きなさい。このとき、あなたの考えの根拠となる 2 つの記事の具体的な記述を用いて説明すること。」のように、複数のテクストをもとに自身の考えを問うものとなっている。このパフォーマンス課題はペーパー版では A4 用紙 2 枚程度に記述を行うことができる。公開されている課題は、科学的なテクストについて整理するものが多い。また、記述問題のあとに、複数のテクストの関係について問う読解問題が出題されることもある。なお、PARCC については、翻訳の許可が取れなかったため、引用の範囲で試訳や要約を扱うようにした。

SBAC では、情報的テクストのパフォーマンス課題は主に情報を整理する説明型と、批判的な意見を表出する意見型に分かれている。このパフォーマンス課題は表 2 のような構造になっている。特徴的なのはテクストを読む目的となるシナリオが示されることである。例えば 8 年生では、歴史の授業のなかで、教師、級友、保護者が閲覧する、1 セント硬貨（ペニー）に関する議論のウェブ記事を作成することになる。そこで、ペニーの生産の是非に関わる 4 つのテクストを読んで、小論文を作成することになる。テクストは学年によって変わるが、最大で 4 つのテクストが出題される。公開されている問題から PARCC と比較すると SBAC に出題されるテクストは、新聞記事や雑誌記事など従来の説明的文章に合致するものが多く、動画像はほとんどみられない。パート 1 では、「ペニーの生産コストを削減する方法について調べている学生」が調べるのに適しているのはどのテクストか？や、なぜそれに適しているかを考える、のように短文での回答を求める記述問題や、各テクストに書かれている内容をボックスから選択する問題など約 3 つの問題がある。その後、パート 2 では、シナリオに合致した小論文の作成が指示される。8 年生の場合は、ペニーの生産の是非についてどちらか一方の立場に立って、相反する立場への反論を含めた小論文を書くというものである。回答では、意見の表明とそれを支えるテクストの記述を中心とした根拠、及び反論がほとんどの回答で記述されていた。SBAC については翻訳の許可を得たため、主に 5 年、8 年、11 年生の課題と回答を翻訳した。この翻訳データはオープンアクセスできる形で公開する。

以上のように、どちらの評価コンソーシアムにおいても、読解問題のようなテクストの理解を確認する問題に加えて、記述型の課題が設定されていた。このように批判的読みを含む高次の読み・書きの能力を自由記述型のパフォーマンス課題によって問うことが、CCSS 下における米国の大規模評価の具体ということになる。

②評価の一貫性と背景にある学力観

CCSS の国語科のスタンダードにおいて中核の 1 つになったのは書くことのスタンダードであり、とりわけある問題に関わって論証を記述することが重視された（西口啓太（2019））。そこでは、情報的テクストを対象として、テクスト内の論証の要素を捉えていくことが重要になる。これは、大学で学んだり、日常生活の問題について考えたりする際に、論証によるコミュニケーションが重要であることを反映している。また、米国の従来の書くことの指導法が、州のスタンダードの水準では、修辞などを含む説得的な要素の指導に偏っていたことが挙げられる。CCSS のスタンダードにおいて、情報的テクストを中心に、論証を捉え、評価するようなスタンダードや、それらの分析をもとに、自身が論証を組み立てて記述していく力が求められるのは、以上のような米国の論証に関する学力観の重視を挙げることができる。

実際に、パフォーマンス課題において重要になると考えられるスタンダードでは、主に中等教育段階で論証を評価することや、論証を組み立てる際に、自身と異なる立場への反論を含めることが明記されている。これが後期高等教育段階では、読むことでは、書き手の意図や修辞を捉え、書くことでは、読み手の価値観やバイアスを想定したり、論の強みや限界を指摘したりするなど、妥当な論証の構造を持つだけでなく、目的やテクストの特質を多面的に評価したうえで小論文などを作成する能力の獲得が目指されている。このようなスタンダードが求める能力の発展性は、パフォーマンス課題にも反映されている。SBAC においては、2 つの立場から 1 つの立場を選ぶ意見型のパフォーマンス課題において、8 年生では、テクスト同士の情報に対立する情報や競合するような情報が、初等教育段階に比べると増加し、複数存在するようになる。また、11 年生では、高等学校で金融リテラシー教育を卒業必修にするべきかについて、教育委員会に送る小論文の下書きを記述するなど、シナリオを通して、学習者自身が利害関係者になっていたり、テクストでは、利害関係を表す表現や情報の信頼性の程度を表す表現が頻出したりするようになる。スタンダードに合わせたパフォーマンス課題の一貫性は、このようなシナリオや出題されるテクストの情報・表現を調整することで担保しようとしていた。また、記述問題の前に見られる読解問題や記述問題等の確認問題は、小論文などを作成する際の重要な論点を押さえておくための手掛かりになるような問いになっていた。

③受容・評価について

CCSS の初期の評価コンソーシアムである PARCC と SBAC に関する評価は、評価システム全般に関わることや、国語科全般の問題を対象とした受容・評価の記述が多く、特にパフォーマンス課題に焦点化した記述が必ずしも多いわけではない。まず、評価システム全体としては、例えば PARCC が行った調査では、制限時間について、学習者の殆どが時間内に問題を解くことができたこと、指示の理解度について、9 割の学生が理解できたと回答したこと、難易度について、5 割は学校の学習内容と同程度、3 割が学習内容より難しいと回答したことなど、評価が無理のないものであったことを示している。パフォーマンス課題評価については、記述（入力）が簡単であったとする回答がほぼ 9 割になっていた。一方で、教師を対象とした研究や評価コンソーシアムに拠らない研究では、評価期間の長さや、大規模な評価への反感、評価項目が調整できないこと（項目を減らせないこと）が不満や課題として指摘されていた。CCSS が従来の州スタンダードより求める能力が複雑であり、試験の難易度（合格水準）が上がったため、州によっては高校の卒業要件を満たす学生が減少し、社会的な問題になっていた。この場合、従来使用されていたテストやポートフォリオが一定の基準に達することで、卒業要件を満たすことにするといった対処ななされていた。このように、評価システム全体では、実行可能性を満たしているが、評価がもつハイステイクスな側面が学習者や教師を圧迫する側面があることは見逃せない。

一方で、情報的テクストのパフォーマンス課題に焦点をあてたとき、ルーブリックに課題があると考えられた。学習者の実際の回答は、ある話題を巡る論争のなかで押さえておくべき重要な論点を踏まえていないものが少なくなく、満点とされている回答でも同様であった。回答の採点とスタンダードとの間に乖離があるのである。この乖離の原因として、ルーブリックが論証に関する能力の差異を明確にできていないことが挙げられる。実際、ルーブリックでは、主張とその根拠、それらをつなぐ理由づけに関する項目はあるものの、スコアの違いが具体的にどのような要素を満たしているのか、いないのか、といったことについては明確ではない。一方、同じく米国の論証に関する能力を捉えようとする Educational Testing Service（ETS）による Cognitively Based Assessment of, for, and as Learning（CBAL）が示す、議論に関する力の発達レベルでは、具体的な区分がみられる（足立幸子（2018））。例えば「議論の構築：立場を決めること」の観点では、基礎レベルでは重要な論点から立場を捉えること、初級レベルでは類似・対照といった観点から立場を捉えること、中級レベルでは明示されていない前提やバイアスなどを適切に分析して立場を決めること、と各レベルの差が議論を分析・整理するうえで、どのようなことが出来ていればいいかを明示している。米国の最新の研究でも、SBAC のルーブリックをより論証の観点を踏まえたものに書き換え、教師が運用できるものとして調整しようとする活動を確認することができた。

以上の検討を踏まえると、複数の説明的文章を対象とした批判的読みの評価においては、ルーブリックが学習者の習熟度を明確に区分し、それが教師などの採点者によって利用しやすいものであることが重要であり、また困難な課題として立ち上がっていることが確認できる。これを踏まえて、我が国の批判的読みの評価においては、求められる能力の習熟度を措定すること、学習者が陥りがちな課題を捉えておくことがそれらの基礎的な知見になると考えられた。

〈引用文献〉

足立幸子（2018）「国語科指導における思考力（アーギュメンテーション・スキル）の評価：米国 ETS の CBAL に着目して」『新潟大学教育学部紀要 人文・社会科学篇』第 10 巻第 2 号、pp.319-328

紅野謙介(2018)『国語教育の危機：大学入学共通テストと新学習指導要領』ちくま新書

高野雅暉(2017)「米国における新しい評価システムの設計意図：PARCC と SBAC の設計過程を中心に」『筑波大学キャリア教育学研究』第 2 号、pp.1-10

西口啓太（2019）「米国の国語教育における書くことの領域の教育課程 ：Common Core State Standards にみる初等・中等教育の系統性」『研究論叢』No.25、pp.13-24

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 村井隆人
２．発表標題 米国の説明的テクストの読みの指導論の検討
３．学会等名 第11回中国・北九州国語教育学研究会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 村井隆人	４．発行年 2021年
２．出版社 中国学園大学	５．総ページ数 42
３．書名 米国SBACのパフォーマンス課題例及び回答の試訳	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関